

Ask the right weight
of the trigger

鯛の御頭

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始まりは中国、軽慶市。

発光する赤子が生まれたことを皮切りに、各地では次々と超常現象と呼ばれる能力を持つ人間が生まれるようになった。

そして世界人口の約八割が何らかの特異体質である超人社会となった現代。

人々の持つ超常の爆発的増加に伴い、それを用いた犯罪も増加していた。

法律ができる速度を無視して増え続けるそれらの犯罪者に対抗するため、同じく超常を使い、犯罪者を捕まえる者たちが現れた。

それはかつて空想の産物でしかなかった『ヒーロー』のようだった。

個性を我が物顔で使い、人々の安寧を脅かす犯罪者サイランとそれを取り締まる英雄ヒーロー

かくして市民権を得たヒーローの存在は世論の後押しを得て、公的職員として定められ、活動に応じて国から報酬が払われることになった。

やがて超常は『個性』と呼ばれるようになり、個性使用関連法が設立された。

日常における個性の使用制限、ヒーロー活動における個性の例外的使用に関する事項、行政機関への個性届、小中学校での個性の一斉調査並びにカウンセリング等々。

超個性社会に合わせ、多種多様な法律が整備される中、国の元で管理される個性もまた存在していた。

目次

1.	入学試験	1
2.	体力テスト	24
3.	新任教師オールマイト	43
4.	USJ	58
5.	落下のち戦闘	69
6.	個性とは	88

1. 入学試験

ヒーローを目指すのならば、どうすればよいか。

職業選択の自由のある現代において、ヒーローという職業に就くためにはいくつかのルートと規定が存在する。

少年少女がヒーローを志すのならば、オースドックスな方法としてはヒーロー科のある高校を受験することだろう。

全国各地にある高校の中で名門と名高いのが、西の士傑高校と東の雄英高校だ。

特に名実ともに長年No.1ヒーローの地位を確固としていたオールマイトの出身校でもある雄英高校ヒーロー科は、毎年偏差値70オーバー、毎年一般入試の倍率は300倍を誇る超難関校だ。

ヒーロー科は2クラス合計40人。

推薦枠4名に加え、一般入試の合格枠は36人。

記念受験の生徒もいるだろうが、単純計算でも一万人を超える人数が全国各地から応募している。

基本的に試験は一年度限り、浪人での再試験は受け付けていない。まさに通るべくし

て通る狭き門だ。

かくしてその門の先に行くべく、私も全国の夢見る少年少女と同じく雄英高校の一般入試に臨んでいた。

会場は雄英高校。

全二日の日程で行われ、実技試験と筆記試験が待ち構えている。

筆記試験は前日のところで終っており、この日行われる実技試験のために受験生たちは1万人規模の人数が収まるライブ会場さながらの大ホールに集められていた。

合格者の偏差値70超という結果が物語る昨日の筆記の難解さに記念受験の生徒の何人かは既に諦めて実技試験を棄権しているが、受験倍率は大きく変わらないことが予想された。

「今日は俺のライブによるこそー!!!エヴィバディセイヘイ!!!」

会場にエコーのかかった大音声が続く。

残念ながら壇上の彼の期待したようなキレのあるレスポンスはない。

「こいつはシヴィー!!受験生のリスナーー!」

白けたというわけではなく、反応に戸惑っているといえるのが大方だろう。

壇上に立っているのはおおよそ受験会場に立つには似つかわしいとはいえない人物だ。スタッズの付いた黒い革ジャン姿、ワックスで重力に逆らうように固めた金髪、耳

にはヘッドホン。

どこかのロックシンガーのようだが、目の前にいるのはボイスヒーロー『プレゼントマイク』

雄英高校の講師の一人であり、第一線で活躍するプロヒーローである。

「実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!アークユーレディ!!」

YEAHHH!!」

プレゼントマイクのテンションの高さと反比例するように、受験生は誰一人口を開かない。

誰か一人ぐらいノリによさそうな人が反応しても可笑しくないと思ったが、受験前の緊張からか、はたまた会場の空気を読んだのか、大方の受験生は真面目に聞いている。

プレゼントマイクの派手な口調とは裏腹に、説明された実技試験の内容はごくごくシンプルなものだった。

・試験は10分間の「模擬市街訓練」

・持ち込み自由、服装規定なし（公共良俗に反しないこと）

・他の受験生への攻撃は禁止

・仮想敵は4種類、難易度ごとに1〜3Pが割り振られており、行動不能にした数

によりPが配分される。

・OPのお邪魔ギミックが登場する。

要点はこんなところだろう。

まるでゲームのようだな、と受験生の誰かが呟いた。

確かに構造だけ見れば、ゲームだ。

しかし、この模擬演習は現実において決して有り得ない話ではない。

仮に何体もの乗り物を同時に自由に操作できるヴィラン、ウイルスにより人に危害を加えるようプログラムを書き換える個性を持つ者がいるとするならば、工事現場や工場
の大型重機を街中で暴徒化させるという事態は想像できる。

機械開発系の個性やプログラミングを得意としたヴィランならば、ロボットの大量暴走
というのは予想できる。

しかもこの試験、単なる点取り合戦ではない。

受験生同士の競い合い、蹴落とし合いに合わせた裏で自分がヒーローならばこの状況を
どう打開するか、そういうところまで見られている前提で動くべきだろう。

第一、倫理観や人柄が問われるヒーローにおいて面接試験がない時点で、行動は全て
記録されていると考えるのは杞憂だろうか。

「俺からは以上だ。最後にリスナーに我が校の『校訓』をプレゼントしよう。かの英雄、
ナポレオン・ボナパルトは言った！

『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者である』と!!
Plus Ultra !!

それでは皆、良い受験を」

あくまでここはスタート地点より前の段階。

合格さえ階段の一つでしかないだと言われているような気がした。

受験生たちは動きやすい体操着や運動着に着替えると、試験会場ごと別れ大型バスに乗り込む。

順番バスに乗り込む関係で指定された会場以外の生徒はまだ実技試験の説明会場に待機している。

基本的に待ち時間はトイレ以外自席で待機であり、携帯電話の使用も不可。

受験のハウツー本を読む生徒もいれば、精神統一をしている生徒もいる。

私は手持ち無沙汰に受験者用のハガキに視線を落とす。

受験番号：1911番

氏名：種子島 杏奈

受験日：20××年2月●日

筆記会場：M79

実技会場：A

以下注意事項や雄英高校の緊急連絡先などが記載されている。

それにしても受験番号はコルトガバメント、筆記会場はM79グレネードランチャーとは、私にとっては覚えやすいが随分と因縁めいた物を感じる。

さて、ここでこの試験について再考してみる。

仮に現在の一般入試の倍率を300倍ちようどとしたところで、10, 800人。

会場がAからJまで10会場あるので、1会場当たり1000人を超える人数が点数を奪い合うことになる。

受験生に対し、どの程度の仮想敵が用意されているのか公表されていない以上、点数はかなり低い点数しか取れない生徒で溢れるだろう。

しかも都市部という状況設定上、ビル群の間を駆け抜け、飛び回り敵を探して動き回る機動力、素敵能力は点数を左右する要因である。受験という緊張する場面、しかも周りの受験生がいる状況下で個性に巻き込まないようにする判断力を必要とする。

単純な個性の攻撃力以外にも、ヒーローの基礎的な能力を図るには試験内容としては十分だろう。

サポート系の個性より、実働的な個性が役に立つ試験ではあるが、その辺は私にとつては運がよかった。

A会場は説明会場でも寄りだったため、移動するバス順番は最後だった。

バスの中では緊張からか、顔なじみがないせいか、隣同士で和やかに談笑という姿は見られない。

ブツブツと念仏を唱えたり、どこか誰ともわからない神様に祈ったり、目を閉じて集中する者がいたり、ぼんやりと窓の外の風景を眺めたり、受験生の過ごし方は様々だった。

私とは言えば、既に持ち込みOKの私物の確認も済んでいる。

頭の中のシミュレーションもいくつかできた。

身体を温められなかったのは残念だが、ヴィランはそんなものを待つてくれる暇はないし、突発的に敵に遭遇したとして準備運動をしていましたなんて言い訳はできない。

個性の事前準備もしたかったところではあるが、基本的に武器の類は持ち込み自由とあつても私の個性では許可が下りなかったので敵と遭遇する前に準備するしかない。

バスから降りると簡単に腕を伸ばしたり、屈伸をしたり、柔軟をしたりして体を慣らす。

大型バス15台からなる生徒全員が下りると、流石に壯観だ。

しかも各会場均等に敵が配置されているとはいえ、10会場もあればこの会場で1位を取るくらいの点数でなければ、そもそも合格ラインとは言えないだろう。

仮にその会場で1位だとしても、他の会場の点のバラつきと筆記次第では、合格ラインすれすれということもある。

人数と言い、難易度と言い、全くもって規格外な試験だ。

「おお、重装備」

「ん？」

某有名スポーツメーカーのものらしい黒いジャージに金髪の男子が話しかけてきた。

「ミリオタ女子？それとも個性？」

実技試験に服装規定がないとはいっても記念受験のコスプレ姿や女装はまだしも、ジャージや中学の体操服が並ぶなかで私の服装は珍しい部類に入るだろう。

安全靴仕様のショートブーツに黒のカーゴパンツ、ポケットがたくさんついた緑色のタクティカルベスト（防弾仕様なし）となれば、完全にサバゲー会場と間違えたかと問われても不思議ではない格好だ。ミリオタと言われてもまあ仕方ないだろう。

「持ち込み自由だからね」

なにせ事前に装備があるかないかで、私の攻撃力は大きく左右する。

備えあれば患いなしとはいうものの、あまりに持ち物が多いと機動力に影響するため、最低限の素材しか持ち込んでいない。

試験内容が知らされるまではもう少し持ち込みを考えていたが、ロボット相手となれば、材料に困ることは無いだろう。

「ふーん。なあ、もし試験終わったら『ハイ、スタートー』

カウントダウンなし、何とも気の抜けた合図だと周りはまだ試験開始を理解していない。

「じゃあねー!」

金髪に手を上げ、一抜けで走り出すと後ろから他の受験生の慌てた声が上がった。

『どうしたー??? 実戦じゃあカウントダウンなんざねえぞ。走れ走れ!! 賽は投げられてんぞ?!!』

やはり試験開始の合図で間違っていなかったようだ。

しかも合図があるだけでまだ試験としてはマシだろう。

受験生を振るい落とすために開始合図なしの奇襲も警戒していたが、流星にそれほど鬼のような内容ではないことに若干安堵した。

プレゼントマイクの叱咤にようやく受験生の大半は走り出してきたようで、後ろからドタバタと足音と共に気合の入った叫び声も聞こえる。

一歩先に走り出したが、機動力は普通としか言えないので速度自慢の個性にはすぐ追いつかれるだろう。

曲がり角には注意しながら、大通りらしき場所へと向かう。

オフィス街のようなビルが立ち並ぶ演習市街地には哨戒行動中であろう1Pの仮想敵が多数待機していた。

1P敵はバイクがウイリーをしたような形状であり、頭部にはカメラ、腕には1Pと派手にペイントされている。

他に敵影は視認できないが、奥やビルの陰の方には2P、3Pの仮想敵が潜んでいるかもしれない。

ポイントとしては1Pだが、手持ちがあまりない今なら丁度よい。
幸いまだ仮想敵はこちらに気が付いていない。

ベストから500gほどの金属の合板を2枚取り出す。

【コンバート転化】

金属板はまるで半固形の液体のようになりにやりと曲がると見慣れたコルトガバメントに変わる。

ビル影に身を隠すようにして大通りを伺いながら、こちらに接近していた1Pの頭部カメラに狙いを定める。

装甲の厚さと強度が不明である以上、脆いところを狙うのが定石だ。

呼吸を整え、曲がり角から姿を現すと哨戒していた1Pが全てこちらを向く。一番近くにいた1Pの頭部に数発お見舞いするとすぐに煙を吐いて停止した。

停止したそいつを盾に、もう3体近くにいた1Pを破壊したところで弾切れだ。

ハンドガン程度で倒せたという判定になれば防弾仕様は取っていない。1Pの強度は知れている。

しかし2P、3Pはポイントに応じた難易度となってくることを考えれば、ハンドガンだけでは心もとない。

連射性を考えると散弾銃や機関銃を使用したいところではあるが、どこから飛び出してくるかわからない他の受験生がいる以上、簡単に使用できない。

停止した1Pをすぐさまテザー銃と89式自動小銃とその弾薬に「転化」させ、騒ぎを聞きつけてもう1体近づいてきた1Pに縦薙ぎに小銃の銃弾を浴びせる。

これだけ廃材が出るのであれば、内部バッテリーを流用したテザー銃を使い捨てた

としても、材料に困ることは無いことは有難い。

意識しなければいけないのは、運悪く流れ弾に当たる受験生を出さないことだ。

腕のいい養護教諭がいるとは聞いているが、死者蘇生の個性は聞いたことがない。

「さてと。射線に出てくれるなよ」

私は銃を肩かけると、集まりだした仮想敵めがけて走り出した。

——試験官モニタールーム——

「いやー、本当に今年は粒がそろっていますねえ」

「世代を重ねるごとに個性を持つ者は増え、さらに個性はより強力なものに進化している。研究途中の仮説ですが、裏付けられる日も遅くはなさそうですね」

実技は受験会場が多く、さらに人の目だけでは限界があるため、会場に多数設置されたカメラで試験会場の様子はリアルタイムでチェックされていた。

仮想敵を倒したポイントは仮想敵と演習場に設置されたカメラで自動判定されている。

試験規則に他の受験生の妨害行為がないか、重傷を負っている生徒はいないか、それとヒーローとして資質の見極めのために試験官は各会場のモニターを見ていた。

無論、受験生の数もモニターに表示される映像の数は膨大なため当日チェックでの他、後日機械と人によるカメラ映像の見直しも行われ、点数に不備がないか吟味される。「今のところA会場は1911番の独壇場ですね」

「彼女の個性の場合、むしろ他の受験生に危害を加えないように注力しているのでしよう」

「なにせ彼女は『指定個性』ですから」

モニターに映った人物は名前と受験番号が表示されている。その中でもA会場のモニターは注目度が高かった。

「そうすると、今年はひよつとするとアレを倒す受験生が現れるかもしれないですよ」

試験は残り1分に迫っていた。

2P敵は四本足のサソリのような見た目で機動力はあまりないが、1Pに比べると装甲は少し厚い。サイズは小型のパワーシヨベルほど。

しかし積んでいるAIが高性能なのか、1Pよりの確に攻撃を避け、また尻尾を鞭のようにして攻撃をしてくるので注意が必要だ。

周囲をなぎ倒すような攻撃に、受験生は一人二人と気絶していた。

「うわあああ!!!」

「目と耳塞げ!!」

そして厄介なのが最もポイントの高い3P。

サイズは2メートル程度で、2P敵を4体並べても大きさは3P敵の方が大きい。

動きは遅いが装甲は厚くハンドガン程度の弾丸であれば弾いてしまい、さらにミサイルまで搭載している。

ミサイルといっても本物のような威力はなく近距離で爆発してもミンチになるような悲惨な結果は出ないが、当たれば強烈な音と光が炸裂し、平衡感覚をやられ、失神する。

「助かった!」

「よし、立てるね」

私は棒立ちの受験生に向かったミサイルをアサルトライフルで迎撃し、空中で撃墜さ

せた。

へたり込んでいた受験生は見たところ大きな怪我もなく、言いつけ通り目と耳をふさいでいたため、平衡感覚も失っていないので試験は続けられるだろう。

私？

念のために持ち込んだ耳栓が役に立った。

備えあれば患いなしだな。

3 P 敵は飛び道具を使いさらに、耐久力もあるため、3 P に挑んだ受験生はことごとく尻尾を巻いて逃げるか、運悪くミサイルに巻き込まれて失神に追い込まれていた。

私はミサイルに成すすべなくしている他の受験生を助けつつ、パンツアーフアウストなど対戦車装備で確実に破壊していった。

対戦車装備が必要な仮想敵を用意するとは、やはり雄英、常識を超えてくる。

3 P は難しいと判断した受験生は早々に標的を1 P、2 P の敵に切り替え、この場にいる3 P はほぼ私が仕留めていた。

一瞬時計を確認すると残り時間はあまりない。

試験も終わりに近づき、新たに出てくる仮想敵の数も少なくなっている。

仮想敵がどれほど出るのか知らされていないが、未だに0 P の姿が見えないのが気に

なる。

てつきり1Pよりも弱い敵がうじゃうじゃと数だけ集まって邪魔してくるかと思っただが、少なくともそうではないようだ。

試験時間が迫る中、お邪魔ギミックが運よくこの場には集まってこなかったと考えるのは楽観的だろう。

私の点数は現在、43P。

かなり点数は取れたと思うが、この広い市街地で他の受験生のところにどれほど仮想敵が集まっているのか把握する手段はない。

残り時間最後まで1Pでも多く稼がなければならぬだろう。

「おい、あれ!!」

「逃げろおお!!」

「嘘だろ、何だよあのでかさ」

受験生たちは叫び声をあげながらパニック映画さながら一目散に敵が現れた方向とは逆に駆け出す。

市街地の最奥、その地面から地響きと共に現れたのは『0P』だった。

「流石国立。持つてる予算が違うな!!」

悪態を付きながら、私も一旦後退する。

土壇場で登場した『OP』とペイントされた仮想敵は5階建てのビル相当の大きさの巨大なロボットだった。

これを試験会場ごとに用意するなど途方もないお金が掛かっているなど一瞬現実逃避をしてしまうほどだ。

受験生たちは我先にと押しつぶされないように逃げ去って行った。

しかし、まだ失神して壁際に寄せられている受験生もいる。

「確かに悪魔虫だけど、無視はできないよなあ」

倒してもOP。

メリツトはない。

むしろ対処を考える間に他の敵を探す方が良くらいだ。

けど時間と距離を考えるとギリギリだが、あのくらいの大さきで、3P程度の強度であると仮定すればできないことは無い。

幸い、要救助者たる気絶組は私がいる最後尾からまだOPより離れている。

私の目の前には足を引きずるように歩く男子生徒に肩を貸す金髪の男子がいるところまで後退する。

「ベリベリ君」

確かこの金髪、放電して仮想敵を倒していたはずだ。

派手な音がしていたから自然と目には入っていた。

「上鳴だ!!」

ビリビリ放電マンは上鳴という名前らしいが、今は二の次だ。

「アレから逃げるより、倒す方が良い。手伝って」

「はあああ???無理無理無理!見て、あの大きさ!!分かる???」

有り得ないと言わんばかりに必死に首を振る。

試験公認のお邪魔ギミックだ。

逃げても良いが、倒す利点はほぼない。

行動点みたいなのをくれればいいが、この実技試験の採点基準は敵ロボットを倒すこと以外に明かさされていない。わざわざ点数のない敵を倒すというのはリスクのある選択だ。

「俺は置いて行ってくれ」

肩を貸されていた男子は力なくつぶやいた。

まあ、言うまでもなくこの状況は絶望的だろう。

「大丈夫、ビル一つ倒壊させるより簡単だよ」

私は倒されて転がっていた3P、2Pの残骸に触れて転化させていく。

「先には気絶している受験生がまだいる。全員を抱えて逃げるのは不可能なら倒すしか

ない」

残念ながら、私はそんなマッチョな力持ちではない。けれど足止め以上のことはできる個性を持っている。

破壊した3Pの車体をベースに簡易戦車砲を作り変える。

操縦部分は省略し、砲弾の発射レバーを外付け、さらに元からあったミサイルの発射機構を復活させ、銃弾は私特製の特別仕様弾に切り替えた。

「放電できたよね。できるだけ最大電力でよろしく」

戦車砲に繋がる二本の銅線を渡す。

迫りくる0P。

逃げる先には気絶している受験生。

考える時間はない。

「つしゃおら、よく分からんがやってやらああああああ」

それらを見比べて覚悟を決めた上鳴君が電極を挿むと、放電が始まりみるみる発射に必要な電力が溜まっていく。無事だったバッテリーからも電力は供給されているが、それでも供給量は十分だ。

0Pはもう私の射程圏内に入っている。

的が大きい分、当たり所は多い。

足元は全体を支えるため、二本の巨大なキャタピラとタイヤで頑丈に設計してあるよ
うで、少々ダメージを与えたところでバランスを崩して倒れることはなさそうだ。

狙うは正面、ロボットの胸部。

「目と耳塞いで、口空けて」

「おう!!ぶちかませ!!」

「うえ〜〜い」

最寄りの二人が耳と目を塞いでいるのを確認すると、私は片耳を抑えるようにしながらレバーを引いた。

「発射!!」

爆音とともに発射された122mmの砲弾はまっすぐOPまで飛んでいくと、腹部の装甲にめり込んだ。

だが貫通するほどの威力はない。

巨大な体がぐらりとするが、すぐに元の体勢に立ち直る。

「くそっ、ダメか」

「いや、大丈夫だ」

私の言葉のとおり、ロボットはその場で足を止めた。

供給してもらった電力が多かったので、貫通性を下げ、着弾した瞬間に高圧電流が流

れるようになっていく。

いかに頑丈かつ巨大と言ってもロボット。・

回路をショートさせてしまえば動かない。

グラグラと不安定にロボットは揺れている。

「ダメ押しするか」

地面に転がっていた2Pを弾に変える、先ほど位の簡易戦車砲に再装填する。

角度をさきほどよりやや仰角に修正し、胸部を狙う

「ぶちかませ!!」

「ウェイ!!」

二人の声援を受け、レバーを引く。

直後に轟音。

着弾と共に胸部が爆発し、胸部に風穴を空ける。お邪魔ギミックはその場で完全に停止した。

「……………マジで倒しやがった」

「うえーい、うえーい!」

マッチョの方は、ハハツ呆然と乾いた笑いを浮かべている。

私は倒せる見込みが十分あると思っていたが、どうやらこの瞬間まで半信半疑どころ

か無駄な足掻きだと思われていたのだろうか。

ビリビリ君の方はいいいね、いいねと言わんばかりに親指を立てた手を私に向かって突き出す。

『試験終了~~~~~!!』

プレゼントマイクの声が響き渡った。

最後にOPの対応をした分、ポイント稼ぎ損ねたのがどう影響するかが気になるが、手ごたえとしては悪くない。

「あー、耳が変な感じ」

「一時的なものだとは思うけど、念のために診てもらって」

マツチヨ君は耳を引っ張ったり、塞いだりして感覚を確かめている。

戦車砲の大音量に一時的に鼓膜が緊張しているのだろう。

二人は単に耳を塞いだけなので、爆音を完全に防ぎきれたわけではない。

音量は通常の戦車砲と比べれば大したことないが、救護班がいるだろうから、マツチヨ君は負傷した足と合わせて診てもらえるだろう。

「ところでさつきから『うえーい』としか言っていないコイツ大丈夫か?」

「さあ?個性使いすぎるとアホになるとか?」

「うえーい、うえーい」

……雄英ならば、個性の使い過ぎでアホになった頭も治せるのだろうか。
こうして私の実技試験は終了した。

2. 体力テスト

試験からほどなくして結果通知が届いた。

筆記は自己採点でまあまあな記録で、例年の合格者と比べても悪い結果ではなかった。心配はしていなかったが、実技は不安が残った。

何点取ったという受験生たちの声を聞く限り、私も悪い点数ではなかったようだが、他の会場の動向がわからない。

それなりに緊張しつつ、雄英から送られた封筒を開けると通知は紙一枚で終わりかと思ったら、無駄に凝った立体映像装置が入っていた。

結果から言えば、合格。

しかも実技は1位だったらしい。

敵ギミックの破壊ポイントだけではなく、どうやら審査制の救助活動Pレスキューポイントも加算されたようで、敵43P、救助60Pで計103P。

ちよいちよい敵ロボットに襲われていた受験生を助けたのと、最後の0Pお邪魔ギミックに対し、救助者を気遣いながら協力して倒したことが評価されたようだ。

そして中学は先生から同級生、はたまた後輩まで大騒ぎだった。

過去には士傑高校のヒーロー科に入学した生徒もいたようだが、雄英高校ヒーロー科の合格者は私が初めてらしい。

しかも今年からあのオールマイトが教員として赴任するらしく、それほど親しくない人からもサインをもらってきてくれないかと言われるほどだった。勿論断ったけど。

そんなもつて、4月になると早速入学式。

雄英高校はヒーロー科2クラス、普通科3クラス、サポート科3クラス、経営科3クラスに分かれている。

来るのは受験以来だが、やはり国立。

金が掛かっている。

余裕を持って見積もつても5m×4mはありそうな巨大な教室のドアを開けると、既に何人かクラスメイトが登校していた。

「おっ！やっぱ受かったのか」

よっ、と言わんばかりに手を挙げたのはどこかで見た顔だった。

「ビリビリ君」

「上鳴電気だ！」

そんな名前だった気がするが、うえうえと言って救護室に運ばれていった印象が強すぎる。

どうやら個性の使い過ぎでアホになったのは治ったらしい。

「そうだった。ごめん、ごめん。種子島アンナだ。よろしく」

「よろしく」

適当に挨拶して荷物を教室に置いて、少々校内を探索することにした。

ボツチだが、まあクラスメイトとはそのうち仲良くなれるだろうとトイレの位置とか、購買の位置とかすぐに使えそうな施設を確認する。

校内の見取り図はオリエンテーションとかでその内、配られるだろう。

そうでなければ校内の至る所に見取り図や教室、施設の案内板は置かれているはずがない。

確実に毎年迷子になる生徒が出ているのだろう。

始業の5分前に教室に戻ると、なにやら騒がしい男子の声がしていた。

「机に足を掛けるな！雄英の先輩方や机の制作者に申し訳ないとは思わないのか!」

いかにも生真面目そうな眼鏡の男子が、机に足を乗せたこれまた見るからにガラの悪そうな男子に注意をしていた。

不良少年（仮）は初日だというのにネクタイを締めずにシャツのボタンも外している。

ああいうのがカッコいいと思っているお年頃か。

「まあまあ、そう頭ごなしに注意するものじゃないと思うよ」

私の席に行くまでに邪魔だったので、ちよつと話しかけてみることにした。

「しかし」

「よく見てごらんよ、彼のストラックスを」

不良少年の横柄なのは、まあ目を瞑ろう。

粋がつているのは雄英に受かるくらい割と恵まれた個性とそれなりに勉強的な意味で頭が良いからなのだろう。

もしくは、高校デビューとやらをして悪ぶっているのかもしれない。

「随分と低い位置で履いているだろう。つまり彼は平均より足が短く、椅子に座ると足が床に付かないことを恥じてああやって机の上に足を乗せているんだよ」

「そうだったのか。失礼した。しかし、きちんと体のサイズにあつた制服を着用すべきだ」

「ナメてんのか、てめーら!!」

素なのか、私の指摘に乗ったのか、眼鏡君は再度真面目に返すものだから不良少年は三白眼を更に吊り上げて机の上に乗せていた足を下ろし、立ち上がった。

腰の位置は、うん、普通だ。

短足ボーイではなかったのか。

「おや、普通の長さだったね。じゃあ足上げてたのはむくみ防止？」

「テメー、絶対潰す」

身長差の關係で上からガンを付けられるが、正直そんなに怖くない。

普段、もつと屈強なお兄さんたちと訓練をしているせいか、精々どつかのチンピラ程度の威圧感だ。

こういったタイプはまず態度と口で脅しつつ、決定的な暴力までは手を出さない。やるのは金魚のフン宜しく付いてくる三下の手下だろう。

「種子島アンナだ、不良少年」

「あ、？端役の名前なんか知るか」

かく言う私も彼の名前は知らないのです、自己紹介は名簿を見ればまあいいか。

「お友達ごつこがしたいなら他よ所そへいけ」

教室にそれまでと違った低い男性の声でした。

入口へ目を向けると、芋虫のように登山用の寝袋にすっぽりと入ったまま立ち上がった男性がいた。

「……はヒーロー科だぞ」

ぼさぼさの長髪に無精ひげ、魚が死んだような気怠そうな目をしている。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君たちは合理性に欠くね」
雄英のヒーロー科の担任は全てプロヒーローというのが売りだ。

ということとは、この人もヒーローなのだろうが、顔は見たことがない。

メディア露出の多いヒーローはそっち方面で忙しいから学生の指導というのはいのかもしれないが、プレゼントマイクや13号、ミッドナイトなど名前の知れたヒーローも教鞭をとっているというから、単に知名度の差かもしれない。

しかも今年はオールマイトが赴任するとあつて、もしかしたらと思っていたが、現実
はそう甘くないらしい。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

予想外の担任に生徒側も怪訝な表情が多い。

「早速だが、体操服着てグラウンド出る」

担任に言われるまま更衣室に移動し、青地に白のラインの入った体操服に着替える
と、広大なグラウンドに集合することになった。

「えー、これから個性把握テストを行う」

入学式は？ガイダンスはないのかと、ボブカットの女子が聞くが、雄英は自由が売り、担任もまた然りとのことだ。

個性の把握なんてヒーロー科にとっては初歩と言えば、初歩。

担任側も生徒の学校及び本人からの申告で事前情報はあるものの、実際の人柄と個性についてはその目で見えないと判断できない。

中学までは個性禁止の体力テストが行われていた。

異形系もいる中で、平均を取り続けることにあまり意味はないと思うが、一度やり始めたものを止めるのには苦勞するというそうだから、続いているのだろう。

相澤先生は文科省の怠慢と言っていたが、どこの学校も雄英のように広大ではなく、なおかつ個性使用が原則禁じられている中で旧態依然の方法が取られているのは分らない。

基本、日常生活において個性の使用は禁止に等しいが、ちなみに私有地ではその限りではない。

「まずは個性の最大限を知る」

先生はテストとして腰パン不良少年にメカチックなボールを渡す。

どうやら不良少年の名前は爆豪というらしい。

これからするテストでは野球ボールサイズの球を砲丸投げの円から出なければ、どういった方法でも構わないので投げて記録を付けるらしい。つまり個性の使用は可である。

「死ぬ!!!」

なんともよく分からない掛け声とともに爆発に乗った球は相当のスピードで飛んで行った。

どうやら不良少年は爆発系の個性らしい。

気化しやすい爆発系の物質を生成して摩擦熱で引火させているのかなにかなだろう。

なるほど、粋がるだけの破壊力のありそうな個性だ。

相澤先生が持つ計測器をみんなに見せると、そこには705.2mの文字が浮かんでいた。

ボールの落下地点までわざわざメジャーで謀らなくても、記録が出る優れものらしい。

「このテストはヒーローの素地を形成する合理的手段だ」

確かに合理的だ。

異形型もそうでない人も、体力テストは記録によって点数化されている。

つまり能力を使わない一般的な数値と個性を使った場合でその差が見えてくる。

「へえ、面白そうだな」

「そう?」

ビリビリ君他、クラスメイトの多数がワクワクといった様子だが、私は何度か試したことのあるテストなのでそれほど珍しいものではない。

「面白そうか」

相澤先生の声が一段低くなった。

「三年間、ヒーローになるための時間をそんな腹積もりでいるのか。よし、トータル成績最下位は見込みなしとして除籍処分にしよう」

「「はあああああ?!」」

不満と驚きの声上がる。

この程度の事案でヒーロー科、退学とは、そんな横暴がまかり通るのか、それとも発破をかける虚言か。

除籍とは言われたが、退学とはいわれていないので、在学はできるがヒーロー科受講が前提の仮免試験を受ける資格はなくなる。

「生徒の如何せんは先生の自由。ようこそ、ヒーロー科へ」

クラスメイトからは理不尽だという声上がるが、理不尽を跳ねのけてこそヒーロー。

3年間、先生は生徒に試練を与え続けるらしい。

「先生、ちなみに普通の体力テストは男女で記録による点数は違いますけど、その辺は考慮されますか」

「一般的なテストはそうだが、これは個性の把握テストだ。無論、男女平等に記録順に点を振る」

「分かりました」

念のため聞いてみたが、その辺も容赦ない。

体力に自信はあるが正直言って私の場合、個性とこのテストの相性は良くない。

クラスメイトの個性次第では、除籍とはいかなくてもかなり下になる可能性が高い。

種目は50m走、握力、立ち幅跳び、反復横跳び、ボール投げ、上体起こし、長座体前屈、持久走の全8種目で行われる。

50m走では、真面目眼鏡くんが3秒台でトップ。足にエンジンが搭載されているように見たまんま足が速い。持久力がいかほどか分からないが、あの速さが体術に使えれば近接は強いだろう。

他にもカエルみたいな女子や角砂糖を食べてムキムキになって走る男子、足の裏から

液体を出して摩擦力を下げ、滑るように走るピンク色の女子など、ただ走るだけでも実に個性的だ。

私は個性の使いどころがないので、普通に走った。

タイムは普通の体力テストなら10点が取れるくらいの速さだが、個性を使っている人に比べるとやはり平凡だ。

その後もテストは行われたが、今のところ私は個性を使っていないので、目立った記録はない。

当然、順位もそれ相応だ。

「種子島、やばくね?」

「上鳴、人こと言える?」

「いやー、こういうテストって異形系とか身体強化系は強いよな」

上鳴は目が泳いでいた。

彼も人にヤバイといいながら、自分の記録もそんなに良くないはずだ。

確かにこういうった体力テストは使い方次第だが、身体強化系や異形系に分がある。

「ちなみに今のところ一位は体からポコポコ色々作ってるポニテの子みたいだけど」

体操服の上から見ても立派な胸部をお持ちの女子は、握力測定の際の機械を巨大ペンチで

挟んでいる。

相澤先生がストップをかけていないところをみると、あれも個性か何かで作りに出したのだろう。

色々と物を作り出せる個性のようだが、私と違って特に種類や材料に制限はないようだ。

50m走、握力、立ち幅跳び、反復横跳び4種目終えて、最下位ではないが、今のところ私は下位5番目以内といったところだろう。

一応ぱつとした記録はないが、それなりに鍛えてきた効果があつたのか、各種目最下位は今のところ取っていない。

5種目目、ボール投げではほんわかした女子が∞という記録を出したり、もじやもじや頭の地味な顔立ちの男子が自分の指一本をバキバキする超パワーで700m以上の記録を出していた。

ちなみに漏れ聞いた話、もじやもじやの彼は入試で自分の腕と足を粉碎するパワーでOPを殴り倒したらしい。

それだけの力なら握力とか50m走とかもつと良い記録でも良さそうなのだが、コントロールができていないのか体にダメージが出ている。

異形型のように生まれつき備わっているものを除き、個性は4歳ごろまでに発生する

のが通説だ。

まるで最近まで全く訓練をしていなかったような使い方だ。

事実、不良少年があいつは無個性だーとか、騒いでいたので隠していたか、数少ないが突然変異というやつなのかもしれない。

「これまじで種子島ヤバイ系？」

「いや、心配ない」

ちよいちよいちヤラ男よろしく絡んでくる上鳴を軽くあしらいつつ、今計測終わったポニテ女子に近づく。

「八百万さん、それってまだ使う？」

測定の順番は特に決まっていらないが、ボール投げの計測をまだ終えていないのは私だけだ。

ちなみにポコポコ創作少女の名前は八百万やおよろずもちゃんと言うらしい。

「いえ、そういうえば処分の方法はどうしたらよいのでしょうか」

ちなみに彼女は比較的小型な大砲を使って測定用のボールを発射させていた。

ボールの重量と強度の影響で飛距離は450mほどであり、現代において1kmの有効射程を誇る大砲の飛距離には届いていなかった。

ちなみに大きなものを作るときにはそれなりに肌の面積が必要なのか、体操服の

チャックを開けて、インナーをまくり上げ、おなかから作り出していた。

男子がガン見してたけど、本人はそれほど羞恥心がないらしい。

うん、確かによい感じのヘソだった。

「先生、コレ使ってもよろしいですか」

「それをそのまま使うわけじゃないなら構わない」

「というわけで、八百万さん、ソレ貫っても良い？」

「ええ、構いませんわ」

八百万さんが残していた大砲を50口径の対物ライフルに、測定用のボールを12.7mmの実弾に転化させる。

大砲は鉄をベースにした合金のようで、ただライフルにするだけでは余るので、固定の二脚部分を大きめにしてある。

「銃!!?!」

「えっ、本物じゃないよね」

残念ながら本物だ。

作っておいてなんだが、弾は計測用のボールを転化させてしまったが、記録はきちんと計測されるんだろうか。

「先生、計測できるかこのまま投げて良いですか」

「良いが、時間が無いから1回にカウントするぞ」

計測は2回行われるので、1回をテストに消費することになるが、仕方ない。測定用の機械を埋め込んであるボールはそれなりに重さもある。

さらに、弾頭部分のみ測定用のボールであり、薬莖は大砲から流用している。

大きく振りかぶって投げるが、円形ではないため、ただ放り投げただけでは飛距離は20mに満たない記録だった。

だが、変形させても正常に作動したようで、相澤先生の持つ端末の方にも記録はきちんと表示されていた。

「ちなみにこの時間、他に実習しているクラスはありますか？」

「ないな」

実弾とみて分かる形状だが、相澤先生はそれについて言うてこないの、とりあえず使用は問題ないだろう。

ポケットに入れていた単眼望遠鏡をスコープの位置に設置し、スコープに「転化」させる。

投擲用の円から銃を支持する二脚が出ないように位置を調整し、腹ばいの姿勢でスコープを覗き込む。

有視界内に人影はないが、仕様として2kmまでは有効射程であるため、途中で運動場

を仕切っている壁にぶつかることになる。

さらに言えば高低差が足りないのです、ベースとした銃のモデルより二脚を長く調整し直して仰角に構える。

「おい、みんな耳塞げ!!」

上鳴君が皆に注意をしてくれる。

自分で言う手間が省けた。

ありがとうと心の中でお礼をしつつ、安全レバーを引き、軽く息を吸う。

スコープを覗き込み、照準を再度確認し、自分の中でのタイミングを計る。

狙撃銃を使うときの、この自分の周りだけが静かになる感覚は嫌いではない。

引鉄に掛けていた指を引く。

直後に衝撃と轟音。

薬莖が地面に高い音を立てて落ちる。

そして引き金を引いてから3秒後には相澤先生の持つ端末がピピッと軽快な音を鳴らした。

記録は1874m。落下地点での距離を考えるとベースの銃の有効射程すら届かなかったが、弾が正規品でないことを考えればますますの記録だろう。

この種目、クラススの2番目の記録になる。

銃の安全装置を元に戻し、落ちた薬莖を拾い上げる。

実弾が校内に落ちてしているとまずいので、弾の回収にもいかなければならない。

「驚きましたわ」

「八百万さんの大砲も火薬と弾の重量を工夫すれば、1kmまで飛距離は伸びたと思うよ。ただ態々砲弾にして飛ばすより、ドローンとかで遠方に運んだ方が距離出たんじやない？まあ、私は材料に困らなかつたけど」

「あつー」

八百万さんはその手があつたかど！という驚きと、思いつかなかつたとに悔しさを滲ませていた。

その後も計測は続き、結果発表。

さくつと10種目合計の順位だけ相澤先生が持つ機械から空中に投影された。

無駄なハイテク具合に感心しつつ、私の結果は14位。

ボール投げの記録が良かったことと、きちんとそれなりの身体を作ってきた結果だろう。

だが、やはり機動力は今後も課題となりそうだ。

「ちなみに最下位除籍はウソな」

相澤先生は、しれつとそう言った。

「君らの最大限を引き出すための合理的虚偽」

「「はあーーーーー!!!」」

「あんなの少し考えればウソと分かりますわ」

多数がシヨックを受けている生徒多数の中、八百万さんや赤白二色染めの男子は特に驚いていなそうだった。

生徒に発破をかける目的とは言え、除籍をこう軽々と持ち出されるのは如何なものか。

思ったより自由すぎるぞ、雄英。

「いやー、これは驚きだ」

好調の根津は、目の前の壁を見上げて大きく頷いた。

目の前には通称：雄英バリアー

学生証などIDのない外部の者をはじくセンサーであると同時に、強固な壁となつて
いる。

銀行の地下金庫にも採用されているような超合金の鋼鉄の扉の一部には、大きな穴が開いていた。

「センサーが感知したのは、最大距離ではなくて着弾位置だったようだね」

「そのようですね」

銃弾を拾いに行った種子島が申し訳なきように相澤に告げたのはこの壁の件だ。

防弾仕様であるはずだが、既に銃弾は壁にめり込んでいた。

防弾仕様と言っても対物ミサイルほどの性能はなく、9mmの小銃を防ぐ程度らしい。

「どうします?」

「腐食しても困るから、このまま埋めるよ。強度は問題ないはずさ」

根津も彼女の力は、事前に資料を渡されていた。

担当官と言われる者と面談も行い、その危険性も重々理解してたつもりだった。

しかしこの壁をみると、その認識を改めざるを得ない。

「なかなか、難しそうだけれど有能な子が入ったね!」

根津は愉快そうにその壁を叩いた。

3. 新任教師オールマイト

個性把握テストが終わった後、やはりガイダンスなどはなく、先生からは資料を見ておくようにと言われたただだった。

各カリキュラムの説明に、校内の見取り図、校則等々が記載されたそれは鈍器として人が殺せそうな厚さの冊子だった。

各部活動や先生の紹介まで乗っていればそうなくても仕方がない。

翌日午前中は、普通に英語や国語といった一般教科。

これもプロヒーローが教鞭をとる。

雄英に勤めているヒーローは教員免許を持っているらしいが、教員をしながらプロヒーローとして活動するのは時間が足りるのだろうか。

ヒーロー科以外の教科の受け持ちがあるかどうかは知らないが、プロヒーローにヒーロー活動以外の所で教鞭をとらせるのは合理的ではないとか意見があがりそうなもの

だ。

そして午後からはヒーロー科の専門科目、ヒーロー基礎学だ。

「わーたーしーがー!!普通にドアから来たー!!」

ヒーロースーツ姿のオールマイトが宣言通り教室のドアから暑苦しく入ってきた。

生のオールマイトだ。

初めてみるが、本当にデカイ。

体重は公式発表だと274kg。

身長もあるが、筋肉の重さだとみてわかる隆々とした体つき。

その超パワーもさることながら、圧倒的な支持率、事件解決数で長年名実ともに不動のNo.1ヒーローだ。

ただ立っているだけでも圧倒される気迫がある。

噂ではパンチ一発で竜巻をかき消したなんて話もある。

「ヒーロー基礎学!!ヒーローの素地を作るために様々な訓練を行う科目だ」

ヒーロー科では単位数も最も多い。

勿論、ヒーロー基礎学では個性使用時における法律や制度も学ぶが、基本的に実践的な訓練が重視されている。

今回は初っ端から戦闘訓練らしい。

さて、雄英高校ヒーロー科では被服控除というものが受けられる。

簡単に言えば、個性と身体能力に合ったコスチュームを学校専属のサポート会社が用意してくれると言う便利なサービスだ。

無論、要望もあれば聞いてもらえる。

「種子島ちゃん、カッコいいわね」

「ありがとう」

更衣室で着替え終わって、鏡で全身を確認していると、後ろからひよっこりと鏡に割り込んできた蛙水あすいさんに褒められた。

防刃、防弾仕様のインナーとグローブ。ショートブーツは踏み抜き防止の鉄板の入った安全靴。それと、あんまりミリタリーっぽくならないようにという要望で出したら、乗馬服が出てきた。

いや、確かに素材は良さそうだし、ベストもジャケットも収納多いから助かるので、ほぼ要望まんま通ったのが凄い。

ストライプ柄の黒のジャケットは金のボタンが付いており、ジャケットの裾は後ろだけ膝丈の燕尾服っぽい仕上がりになっている。ベストは灰色で正面から見ると、少しだ

けジャケットから見えるのがおしやれな感じだ。シャツのフリルは趣味じゃないけど、全体的に見れば、バランスは取れている。

白いズボンが脚にそってピッチリパツパツなのは、乗馬服の見た目に合わせるなら仕方ないだろう。シャカシャカ歩きたびに鳴るようなものなら変更を申し出ていたところだ。

かつちりとした見た目に反して、結構軽い素材でできているし、柔軟性も高い。

普段の訓練用にも欲しいが、多分値段は可愛くない。

「ほんとだ、デキる女って感じだねー！」

「麗日うららかにさんは宇宙服？」

「あんまり細かく要望出さなかったら、こうなっちゃって。パツパツなの恥ずかしい」
着替え終わったのか、麗日さんも会話に加わった。

彼女の服は、確かにスタイル出る服装だ。

足は大きめのニーハイブーツで分らないが、太ももから胸元までは体にフィットするデザインなので、見る人が見たらスリーサイズとか丸わかりだ。

開発者は男だな、きつと。

「皆さん、準備はよろしいですか」

「はい」

八百万さんの確認に、麗日さんが元氣よく返事をした。

それにしても、八百万さんの衣装はなんだ。思わず二度見した。

「八百万さん、それ要望出した感じ?」

「私の個性だと服で覆う部分が多いと、大きなものは作りにくいのですから。本当はもう少し布の面積が少ないと良かったのですが」

「ビキニアーマーとか?」

確かに個性が創造で、肌からポコポコ生み出すなら、露出が多い方が良いんだろうけど、防御力が気になる。

胸部が立派な装甲になるのか???

たぶんサポート会社も悩んだ結果なんだろうけど、競泳水着の方がまだ露出度控えめだよ。

足丸出しじゃん。

一応、太めのベルトでお尻とか隠れているけど、カメコにローアングルで狙われる衣装だね。

たぶん、ヒーローの衣服に関する露出規定ギリギリじゃないか?

ミッドナイトが登場してからようやく法の整備がされたっていうけど、これセーフなの?

女子同士、コスチュームの感想を言い合いながらグラウンド・βに移動すると、男子もほぼ集まっていた。

衣装にも個性出るね。

爆豪くんの不良感とか上鳴とかチャラさ溢れ出ている。

「始めようか、有精卵ども!! 戦闘訓練のお時間だ!!」

「先生、ここは入試の時の演習場ですが、また市外演習訓練を行うのでしょうか」

フルフェイスから声が聞こえたと思ったら、飯田君だった。

仮面戦隊ものか、もしくはロボっぽいコスチュームでかつこいい。

強度もありそうだから、速さを使って蹴りとかパンチとかもできる作りなのだろう。

「いや、もう二歩進んで屋内での対人戦闘訓練だ!!」

オールマイイト曰く、敵ワイラン退治は屋外で見られることが多いが、凶悪敵は屋内での出現

が統計的に高いらしい。

「監禁、軟禁、裏取引。このヒーロー飽和社会では真に小賢しい敵は屋内に潜む。これから君たちには『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて2対2の屋内戦闘を行ってもらおう」

「基礎訓練もなしに?」

蛙水ちゃんが、疑問を呈すとその基礎をやるための実践らしい。

ただし、今回は入試のようにぶっ壊せばよいというものではない。

状況設定としては、敵がアジトに核兵器を持っていて、ヒーローはそれを処理する。

ヒーローは制限時間内に敵を捕まえるか、核兵器に触れること。

敵は制限時間を逃げ切るか、核兵器を守り切れれば良いらしい。

最初5分は敵側に核兵器と会場のセッティング時間が設けられている。

ヒーロー側にも見取り図と作戦を練る時間らしい。

くじ引いたペアは烏頭の常闇君だった。

敵：爆豪、飯田ペアVSヒーロー：麗日、緑谷ペアが一組目だった。

参加者以外は同じビルの地下にあるモニタールームで観戦できる。

感想を一言で言えば、爆豪もヤバイが、緑谷もヤバイ。

パンチ一発でビル4階ぶち抜くとか、力の使い方さえ身に着ければ圧倒的な破壊力だった。

途中、私怨の喧嘩みたいな感じだったけど、結局勝利を優先した緑谷君の勝ちに爆豪君はショックを受けていた。

演習として言えば、結果的にヒーローチームが勝ったが、飯田君が一番敵として相応しい行動をとっており、麗日ちゃんは中盤の気のゆるみと、核兵器としての取り扱いはなっていない点があったがマイナス。爆豪君と緑谷君は屋内での大規模破壊行為は厳禁ということだ。

以上、総評八百万百ちゃん。

オールマイトも文句なしの実践評価だった。八百万ちゃんって推薦入学らしい。そりや頭も良いはずだ。

そして二組目。敵：尾白、葉隠ペアVSヒーロー：轟、障子ペアも見ごたえあった。てか、一瞬で終わったけど。

障子君が索敵して、轟君がビル丸ごと凍らせて敵の動きを封じ、核兵器に触れて終わり。

しかも轟君はなんと氷と炎のダブル使いらしい。

チートか。

面制圧は私の苦手とする相手だ。

それより、障子君の個性は魅力的だ。

個性で複製腕を作り、その先に目だったり、耳だったり、体のパーツを作れるらしい。しかも本来の耳の性能よりいいのか、ビル内部を歩き回る足音も聞こえるらしい。

腕力もすごいのは個性把握スポーツテストのときに見たが、視力もきつと良いのだろう。

今後組むことになったら、観測手としてぜひその個性を遺憾なく発揮してもらいた

い。

いなみに、葉隠ちゃんは透明人間。尾白君は尻尾を使った体術を得意としているらしい。

そして私は三組目は私と常闇君。振り分けはヒーロー組だった。

対戦相手は砂藤、口田ペア。

砂藤君は砂糖を食べるとムキムキになり、パワーが増大する。

食べすぎると一時的にアホになるって言っていた気がする。

口田君は無口だが、確かボール投げの時に鳥にボールを運んでもらっていたので、動物を操る個性とみて良いだろう。

見取り図を見ながら、指定されたビルとは少し離れた位置で待機していた。対象のビルからは死角になっており、おそらくまだこちらの動きは察知されていない。

ハトとかネズミも近くにいないから、口田君が監視しているっていう線も薄い。

「とりあえず、個性の紹介しようか。常闇君はその影だよね」

「黒 ダークシャドウ 影だ」

『ヨロシクナ』

常闇君の背後からにゅつと出てきた黒い影が喋った。

腹話術なのか、それとも別人格なのか不明だが、目が付いているとなると常闇君とは独立して視覚的なサポートもできると考えていいのだろうか。

「よろしく。ちなみに分裂とかできる？それとも本体から離れられない？あと目は独立？」

「俺からは離れられず、分裂はできないが、黒^{ダークシャドウ}影の両手を使えばかなりの距離をカバーできる。ただ、範囲は光の指す広さに影響する。視覚はそれぞれ独立している」

「なるほど。光が強いと影が濃くなるというより、光にかき消されると考えた方が良いね。暗いところだと強いと」

「闇を纏う方が性に合っている」

なんか一々言葉がカッコいいというか、厨二臭い。

まあ、本人の黒歴史になるだけだから放っておく。

たぶん、コスチュームの黒いマントは遮光カーテン的なものだろう。

「ちなみに、相手の影には作用できる？」

「いや、操れるのは黒影だけだ」

「OK。それを踏まえて常闇君、瞬殺できる方法思いついたんだけど、乗る？」

相手が近距離戦闘タイプと音使いだからできる技だ。

口田君、自身の力が分からないが、スポーツテストは私より成績は下だったから、身体能力的には普通だろう。

ギャングオルカみたいに超音波とかプレゼントマイクみたいに大声出せるなら話は変わってくるが、彼がしゃべっているところを個性把握テスト以来見ていないので、あくまで可能性の範囲内にとどめる。

「瞬殺か。随分と自信があるんだな」

「個性というより、コスチュームの備品頼りだけどね」

サポート会社様様だ。

追加要望に合わせてお礼の手紙も書いておこう。

「まずは話を聞かせてもらおうか」

ニヒルに笑う常闇君に私は作戦プランを伝えた。

ライオン
敵 サイド

敵側が根城とするビルの子か所の入り口のどちらにも、口田が個性を使って呼んだネズミが警戒に当たっている。

その他にもビルの各所にネズミの見張り番がいるので、どのルートを通ってきても、

ヒーローの行動を把握できるようにしてある。

「よし、これでどこからでも迎え撃てるな」

気合十分と言った佐藤に、口田はコクコクと首を縦に振る。

核兵器（ハリボテ）は5階に設置した。

単純に1階から上がってくるまでの時間稼ぎが目的だ。

そしてこの部屋の入り口は下からネズミが通れるくらい隙間しかないように辺りから物を移動させ、二つある入り口の扉の片方は椅子やロッカーで塞いである。

事実上、侵入経路が一つであれば、対策はしやすい。

昨日見た個性テストから推測すると種子島の銃、これの攻撃力は高いことは見てわかる。だからこそ狭い室内での乱戦に持ち込めば迂闊に発砲はできないと考えていた。

双方5分の準備時間を終えるタイマーが鳴る。

「よっしゃ、気合入れていくぜー！」

砂藤が拳を握りしめた。

瞬間、背後ガラスが粉々に割れる。

窓側を振り返ると同時に、室内に閃光と爆音が奔った。

目を開けていられない光に加え、まるでこの部屋の核爆弾（仮）が爆発したかのような轟音に二人とも堪らず目と耳を塞ぐ。

目を閉じていても瞼を透けるような強い光と、平衡感覚を失うような強烈な音に、思わず身を守るように膝を付く。

一瞬で過ぎた光に恐る恐る目を開けると、そこには闇が広がっていた。

「捕獲完了だ」

砂藤と口田が暗闇の視界から解放され状況を確認すると、腕にはすでに捕獲を示すテープが巻かれ、常闇が核兵器（仮）に触れていた。

「えー、総評に移りますが、今回はヒーローの見事な作戦勝ちだったね」

モニタールームに戻ると、満面の笑みのオールマイトに出迎えられた。

オールマイトが笑顔以外浮かべているところをみたことないけど。

あれって表情筋固定されているんだろうか。

「向かいのビルから種子島少女が打ち込んだのは音響閃光弾。まず場を混乱させる。次に常闇少年がビルからビルへ飛び移り、屋上から5階の部屋に侵入。ダークシャドウ黒影で二人を拘束し、核爆弾を確保!! 先手必勝!! 実に無駄のない作戦だ!!」

準備の段階で目的のビルから少し離れたビルとビルの隙間に黒影ダークシャドウを足場にして垂直

にビルを駆け上がり、屋上伝いに静かに目的のビルに降り立つ様はモニタールームで歓声が上がったらしい。私も見たかった。後で映像見せてもらえるのだろうか。

「敵チームは地上以外の侵入経路も想定すると良かったな」

「ういっす」

『コクコク』

砂藤君と口田君はまだフラフラするのか、常闇君の両肩に手を置いて平衡感覚を保っている。

「あー、種子島少女。ちなみに奇襲が失敗した場合は想定していたかい??？」

「常闇君と合流し、二人で突入して核爆弾を回収する予定でした。合流のポイントも打ち合わせ済みです」

「Excellent!! 実に用意周到だ」

オールマイトにサムズアップされた。

どうやら高評価っぽい。

常闇君はフツと分かりにくく笑っていた。褒められてうれしいらしい。

「種子島少女は装備品がよく研究されている。すなわち、自分の個性をどういった状況で使うか想定し、必要なものを把握できているという事だな」

「ありがとうございます」

個性の訓練に関しては、随分と時間もお金もかかっていると自覚している。必要な物、あつたら便利な物、装備品については、個性を訓練している先の先輩方に随分と相談した結果でもある。

それで半端な結果を出したらケツを蹴り上げられる。

というより、他の人たちをみると、どうやら個性の特訓って普通はそれほどしないものだろうか。

雄英の合格者だったら、もつとこの年齢で個性の限界の把握と個性の使用訓練を積んだ精銳が集まっていると思つたが、爆豪君といい、緑谷君といい、麗日さんといい個性に振り回されている気がする。

取り敢えず、今週の報告書に書ける内容ができたので今回の演習は良かった。

4. USJ

オールマイトが教員になったことで、連日学校にはマスコミが押しかけている。

まあそれでちよつとした騒ぎもあつただけど、とりあえず学校生活はちよつとずつ慣れてきた。

部活には入ってはいないが、最近は学校地下にある特設射撃場でスナイプ先生考案の射撃コースをめぐるっている。

全66面。遠距離攻撃系とか飛び道具系の個性の人たちが主に使用できる。ちなみに実弾は使用禁止。主にペイント弾やゴム弾を使用している。

クリアしたらスナイプ先生と射撃勝負できるといふ噂だがだが、私は今半分クリアした。

先輩に聞くと、随分と攻略速度は速いらしい。

やったね。

あと変わったことと言えば、クラス委員が決まったくらいか。

女子は八百万ちゃん、男子は飯田君。

妥当な人選だった。

当初は緑谷君が選ばれていたが、なんやかんやあつて飯田君に譲った。
ちなみに私は八百万ちゃんに投票したので大いに満足だ。

そして今日のヒーロー基礎学は人命救助訓練レスキューだった。

コスチュームの着用は自由という事だったが、私は着替えていくことにした。
基本、手持ちがなにもない状況は好ましくない。

救助なら、ワイヤー銃作ったり、閃光弾打ち上げたりすることもできるから、戦闘向きの個性ではあるが、救助も想定してはある。

雄英の敷地は広大なので、移動は小型バスだった。

委員長になった飯田君が無駄に張り切っていたが、バスの前半分は横並びの割と自由な感じの設計だったため、出席順に奥から並べーと言っていたのが無駄になった。

体格良い生徒もいるから、普通の二人掛けの椅子だと不便だろうから、長椅子タイプが置かれているんだろう。

「私、なんでも思ったこと言っちゃおうの緑谷ちゃん」

「あ、はい!!蛙水さん」

「梅雨ちゃんと呼んで」

私の向かいに座った蛙水ちゃんが、緑谷君に話しかけた。

「貴方の個性、オールマイトに似ている」

「そそそそつそ、そゝかな。でも、僕はその」

緑谷君はなんか慌ててる。

そりや、オールマイトと似てるなんて言われたら照れるか焦るよな。

「待てよ梅雨ちゃん。オールマイトは怪我しねえぞ。似て非なるアレだぜ」

切島君、いきなり梅雨ちゃん呼びとか手馴れている。

それより、まあ、言いたいことは分からんでもない。

緑谷君はオールマイトファンだと公言していたので、掛け声が一緒でも気にはしない。
い。

個性は慣れてないと言う感じがしっくりくる。

使うたびに骨折とかとんだ博打個性で、今のままでは実践では長時間の任務は無理だろう。

「しっかし増強型のシンプルな個性はいいな！派手でできることが多い！

俺の「硬化」は対人じゃ強いけど、如何せん地味なんだよな」

「僕は凄くカッコいいと思うよ。プロでも十分通用する個性だよ」

「プロなー。しかしやっぱプロヒーローは人気商売みたいなどころがあるぜ」

確かにヒーローのランキング付けは事件解決数だけじゃなくて、支持率も影響してい

る。

某万年2位のヒーローは事件解決数で言えば、オールマイトを上回っているが、如何せん支持率が低い。

主に顔が怖いのが原因か、塩対応が原因かなんて分析しているヒーローファンもいたが、仕事一貫な姿勢がコアなファンを呼んでいるのも確かだ。

「派手で強ええつつつたら爆豪と轟だな」

「種子島ちゃんもよね？入試のOP、倒したんでしょ」

梅雨ちゃん、どこからその話聞いたんだ。

「まあね。壊すだけで良いから困りはしなかったかな」

ついでに試験終盤で出てきたから、材料にも困らなかった。

「マジ？」

「上鳴までなんで驚いているのさ」

同じ会場で試験を受けていたはずの上鳴が驚いていた。

「いや、半分ぐらい夢だったかと」

「確かに電圧掛かりすぎてアホになってからね」

ウエーイ、ウエイ、ウエイ、しかしやべららないアホになっていたから、記憶があいまいらしい。

上鳴は一気に高出力を放ったり、長時間個性を使いすぎると一時的にアホになるらしい。

「爆豪ちゃんはキレてばっかだから人気出なさそう」

「それな」

梅雨ちゃんに完全同意だわ。

申告通り思ったことを本当にすぐ口に出しちゃうらしい。

「んだと、出すわコラ!!」

「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだような性格だつて認識されている方がすげーよ」

上鳴、上手い事言った。

「上鳴、座布団」

「あざーす」

上鳴と小さくハイタッチすれば、爆豪君は椅子から立ち上って殴りに来そうな切れっぷりだ。

「てめーのボキャブラリーは何だコラ!!殺すぞ!!」

爆豪君の殺すつて、見た目はまあまあ怖いけど殺気を伴わないから何ともチンピラ感が漂う。

殺す、殺すと言う割に訓練以外で暴力には出てこないし、人の弱みを握ってねちっこく人を追い詰めるような恐怖感もない。

うん、どこをどう見てもヒーローじゃなくてヤンキーかチンピラだね。

そうこう話をしていううちに、会場に到着した。

嘘と事故の災害ルーム。通称：USJ

大阪にあるテーマパークに怒られそうな名前だが、内臓がひっくり返るようなジェットコースターや派手な映像アトラクションとは違い、マジで燃えているビル群に土砂と瓦礫が散乱する地帯、暴風吹き荒れるドームなど人工的に作り出した災害がこの施設にまとめられている。

規模だけは本家というか、テーマパークにも引けを取らないのではないか。行ったことないけど。

「はじめまして、みなさん」

会場には先に今日相澤先生と共に活動する先生が到着していた。

「スペースヒーロー『13号』災害救助で目覚ましい活動をしているスペースヒーロー」

「わー!!私好きなの、13号!」

緑谷君と麗日さんが目を輝かせている。

船外活動用の宇宙服っぽいコスチュームで、素顔不明のプロヒーロー。

とある事情で素顔も知っているので、入学してからは一度挨拶に行つたが、ちゃんと先生しているのにちよつと感動した。

「始まる前に、小言とを一つ、二つ、三つ……」
増えてるよ、おい。

「皆さんご存知だと思いますが、僕の個性は、ブラックホール」

「どんなものでも吸い込んでしまいます」

「その個性でどんな災害からも救助してきますよね」

緑谷君の説明に麗日さんが首を大きく縦に振っている。

ロックバンドのヘッドバン並みの速度に残像が見える。

「しかし、人を簡単に殺せる個性です。皆さんの仲にもそう言った個性がいる人はいるでしょう」

確実に今、13号と視線が合った。

ヘルメット越しで視線は分からないはずだけど、そんな感じがした。

13号の言葉は、何十、何百回と言われてきた言葉だ。

超人社会は個性を資格化し、厳しく制限することで、一件成り立っているように見える。

しかし、一歩間違えれば容易に人を殺せる。 “いきすぎた個性” を個々が持つてい

「この授業では心機一転！人命のために個性をどう使うか学んでいきましよう。君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるためにあるのだと心得て帰ってくださいな」

なんか、ちゃんと13号から個性について聞いたのは初めてだったな。パチパチとクラスメイトから拍手が広がる。

拍手をしながらちらりともう一人の先生、相澤先生をみると、なぜか中央の噴水を見ている。

釣られるようにそちらをみれば、なんか黒いもやもやが空中に渦巻いていた。なにあれ？

あれも設備の一つなのか？てか、あんなのあったか？

「かたまりになつて動くな!!」

相澤先生が大声で叫ぶ。

「13号生徒を守れ！」

黒い靄のなかから現れたのは人だった。

私は、すぐさまジャケットのポケットに手を入れ、鉄板1枚、強化プラスチック板1枚をグロッグ18に「転化」させ、ゴム板を弾に変化させ、弾倉に詰め込む。

「なんだ、アリヤ。入試の時みたいに始まっていた。パターン？」

切島がこれも訓練の一環と思っているが、相澤先生が一蹴する。

「動くな!!あれは敵だ!!」

現れたのは一人、二人ではない。

目視で確認できるだけでも20人はいる。

見た目は小悪党。その辺のチンピラをお金で雇ったのだろう。

背筋が凍るような寒気もしなければ、呼吸が止まりそうな殺気もない。

持っている武器もその辺のホームセンターで出に入りそうなナイフやバットであり、

銃器の類は見かけない

「敵^{ツイン}ンンン???ヒーローの学校に入りこんでくるなんてアホすぎる」

切島君が叫ぶが残念ながら、単なるアホで済まなそうだ。

大半はチンピラに見えるがああ黒くて、脳みそむき出しの奴はヤバイ。

「先生!侵入者用のセンサーは?」

「もちろんありませんが…」

八百万さんが、13号に確認するが、結局鳴っていないとなれば、無効化されている

が、なにかだろう。

「現れたのがここだけか、学校全体か。センサーが反応しないなら、無効にそういうことができる個性持ちがいるってことだ。校舎と離れた隔離空間に少人数がいるところを狙ってきた。馬鹿だがアホじゃねえ。なんらかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ。」

轟君が冷静に状況を分析する。

「13号避難開始！学校に連絡させ。センサー対策も頭にある敵だ。^{サイラン}電波系のやつが個性で妨害している可能性もある。上鳴、お前の個性でも試せ」

「ツスー」

先生はそう言うと、一人敵の集団に突っ込んでいった。^{サイラン}

緑谷君がいくら先生でも多人数は!!と声を掛けたが、先生は捕縛布を使って人同士をぶつけたり、個性を消したりして、多数を相手取っている。

相澤先生は抹消ヒーロー：イレイザーヘッド。

瞬きせずに見た敵の個性を消すらしい。^{サイラン}ちなみにドライアイ。

目を酷使するなら、あまり長時間の戦闘には向かないタイプだ。

異形系相手だと無意味な個性だが、そこはキャリアと技術で補っている。

戦闘の状況は気になる所ではあるが、足手まといなのは私たちだ。

逃げることに意識を集中させると、目の前には黒い渦が宙に浮いていた。

「初めまして。我々は敵^{ヴィラン}連合」

黒い霧の中で目らしきものがやりと上を向いた。

「僭越ながらヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは平和の象徴、オールマイトに息絶えていただきたいとおもいました」

^{ヴィラン}敵の狙いはオールマイト？

だが、こんなに簡単に目的を話すか？

^{ヴィラン}本来だったら、オールマイトもこの時間は授業に参加しているはずだった。

敵はつまりオールマイトもの行動もしくはA組のスケジュールを把握していたということだ。

「その前に俺たちにやられるってことは考えてなかったか!!」

切島君と爆豪君がそれぞれ黒い霧に殴り掛かる。

この黒い霧、喋るってことはこれも個性の一部なのか。

「危ない危ない。そう……生徒とはいえ優秀な金の卵」

「ダメだ。どきなさい二人とも!!」

13号先生の制止も意味なく、私たちは黒い霧に吞まれた。

5. 落下のち戦闘

目を開けたその先は燃え盛るビル群。

黒煙と熱気。

火災エリア上空。

落下先はコンクリの地面。

「紐なしバンジーとか無理!!」

咄嗟に装填したゴム弾を銃内部で伸縮性のあるゴムの紐に変える。

それを発射し、ビル屋上の手すりに結び付け、両手で銃を支える。

完全にはスピードを殺しきれなかったので、ゴムが落下の重さと体重の重みで伸び切ったその瞬間に、ゴムを弾に戻るよう転化させる。

ちよつと高い位置から地面に降りたので、足に衝撃が走ったが、折れてない。問題は
ない。

「無事か」

「死んだと思った!!」

小声で叫び、声のする方を見れば、ちよつと土汚れた尻尾君がいた。

彼も着地に成功して無事だったらしい。

「尻尾君」

「尾白だ」

「ごめん、尾白君」

まだ痺れる太ももを拳で叩きながら周囲の状況を確認する。

目視の限り、^{ワイラン}敵の姿はない。

運がいいのか、^{ワイラン}転移先を敵のいるところという細かく設定できないのか、とりあえず

運が良かったことにしておく。

「他の連中は無事か」

「見てない。バラバラに飛ばされたみたいだね」

USJは火災、水難、暴風・大雨、山岳、土砂、倒壊の6つのゾーンがある。

私たちが飛ばされた先は火災ゾーンで、私にとっては水難か暴風・大雨よりマシだったが、出入り口までが一番遠い。

「誰かが隙を見てここから他の先生を呼びに行くのか」

「いや、それじゃ時間がかかりすぎる」

まさか入学して数日で使うことになるとは思わなかった。

しかも学校内で。

首に掛けていたネックレスを引っ張り出す。

ドックタグのような銀のプレートに名前が彫り込まれている。

よくよく見ると二つのパーツがブロックのように噛み合わさったそれをねじり、スライドさせると半分が外れた。

「なんだそれ」

「緊急用救急救難信号装置。接続先から学校へ連絡が入るシステムになっている」

断面は黄色のランプが小さく光って消えた。

エラーだと青になるため、少なくとも信号は発信されている。

強力なGPSの独自回線を用いており、送信した信号が受信機に接続されず遮断されていれば接続不能エラーが出るというハイスペックな代物だ。

ちなみに使うのは今回が初めてだ。

「なんでそんなものを持ってんだ？」

「説明後。とりあえず中央に戻ろう」

敵の侵入した数サイランが分からない。

二人というのは如何にも心もとない。

このあたり一帯のビルは火災で絶えず熱せられており、迂闊に触ると火傷する。火の加減と見晴らし、風向きも考えながら、通りを覗き見る。

比較的大きい通りにはナイフを持ったチンピラが闊歩していた。

あの黒いもやもやが敵を先回りして各エリアに配置していたらしい。

無謀なことをやっている割に最低限、足止め役を配置する頭は回るようだ。

狙いはオールマイトと言ってはいたが、あわよくば生徒を殺してセンサーシヨナルな事件にする愉快犯かもしれない。

「取り敢えず、あつちのビルに音響弾発射して注意を集める。集まってきた敵に見つか
らないように避けていくよ」

「分かった」

ビル影には、風の影響で煙が溜まりやすい場所もある。

このエリア自体、慎重に動かなくてはいけない。

合金をもう一枚、ジャケットのポケットから抜き出すとサイレンサーに転化して取り
付け、装填していたゴム弾を音響弾に切り替える。

「くくよ」

「ああ」

パシユと空気が抜けたような発泡音の後に、入り口とは反対方向、ここから20mほ
ど離れたビルから轟音が響く。

「なんだ!!」

「あのビルの中だ!!急げ」

チンピラたちは弾を打ち込んだビルに集まっていった。

ハンドガンだと射程がネックだ。

だが、材料を集めている時間はないので、離脱を急ぐ。

「よし」

「こつちだ」

尾白君が先頭、私が後方を確認しながらその場からできるだけ静かにその場を離れた。

音響弾で随分と人が集められたのか、落下した地点から火災エリアの出口まではほぼ

1対2か、2対2の敵サイランだったので、どうにか敵をやり過サイランごせた。

敵を呼ばれると面倒なので、できるだけ敵には遭遇しないように方向で進み、やむを得ない場合は一撃で静かにさせる。

ゴム弾は早々に使い切ったので、尾白君に気絶させられた敵サイランの靴を強奪して、布弾とゴム弾に転化させる。

熱い地面を走りまわれないようにする目的もあるが、布とゴムで非殺傷性の弾がで
き、手軽に調達できる材料がこれくらいしかなかったからだ。

敵が持つていたナイフを数本集めて予備のリボルバーに転化させて腰のホルスターに
吊るしてある。

敵の臭い靴を転化させるのは非常に萎えるが、今は非常時だ。

中央に向かって走っていると、土砂ゾーンから特徴的な赤白半分の髪の毛の男子が駆け下
りてきた。

「轟！」

「無事みたいだな」

走りながら簡単に私と尾白君を上から下まで見て、視線を中央広場に戻した。

轟君も無傷みたいだ。

「なんとかね」

煤汚れてはいるが、二人とも致命傷はもらっていない。

「そつちも数だけ多いチンピラだった？」

「ああ」

ビル一棟凍らせられる轟君なら、平面の土砂ゾーン全体を凍らせるのもお手の者だろ

う。

土砂なら状態にもよるが、水分量はコンクリより多いはずだ。

「あいつらの策を聞き出した」

走りながら後方を確認しながら、状況を話し合っていると、どうやら轟君は尋問まで終わらせたらしい。

どの程度の氷結させたのかは言葉だけでは分からないが、体表だけ凍らせられても凍傷とか低体温で無傷ではいられないから、ゲロったんだろう。

「チンピラは俺らの足止め。オールマイト殺しは手を顔に貼り付けた細身の男が実行役らしい」

「秘策があるってこと？」

「具体的な方法は不明だ。集めたとはいえ三下相手に肝の作戦バラすわけないよな」

要するにチンピラは金で集められたか不満の捌け口をエサに集められた方がいいが、良ように使われているということだ。

だが、これでオールマイト殺害の実行役は黒モヤと顔に手を貼り付けたハンドマンのと、脳みそむき出しの奴の可能性が高くなった。

黒モヤにワープで海中数キロに沈められたら流石にオールマイトでも水圧で死ぬ。

……かもしれない。

ハンドマンと脳みその個性が分からないのは痛い、オールマイトの超パワーを圧倒するような拘束術か何かを持っているのだろう。

もしくは生徒を人質に一人くらいするのか？

いや、オールマイトは今まで人質救助も多数している。

ただのパワーだけじゃなくて、あの見た目に違わぬ筋肉は瞬発性も兼ね備えている。

伊達でNo.1に長年背負ってきているわけではない。

考えたところで、可能性だけが過ぎていく。

そうこうして走っている内に中央の噴水が見えてきた。

「オールマイト？」

「だな」

砂煙がまるで爆弾でも落ちたかのように高く立ち上る。

オールマイトが脳みそ相手にバックドロップを決めたが、お互いその姿で制止している。

「ワープ野郎だな」

オールマイトの両手足をみると、影がやけに大きい。

ブリッジの体勢のまま身動きしない。

目を凝らすと脳みそ野郎が腰のあたりで体が消えて、頭がオールマイトの背後から脇腹を掴んでいる。

ワープ野郎が一部分だけワープさせてきつきのバックドロップをなかつたことにしつつ、背後を取っていた。

轟君は一段と走る速度を上げた。

私も銃のセーフティを外す。

弾数は10発

リボルバーを銃弾に転化させれば、弾数は増やせるが、殺傷性が上がる。

実弾許可は今の私には下りていない。

どうすると悩んだのは一瞬。

走りながらに続けざまに連射し、ハンドマンを牽制する。

黒モヤは実体があるかさえわからないし、ワープで弾なんていくらでも転移させられる可能性があるのです、仲間を狙いをつける。

倒せるとは思っていない。

一瞬の痛みに怯めば、相手の注意がこちらに引ける。

音に注意が向いたのか、私が銃を放った瞬間、轟君が地面に氷を走らせた。

「オールマイト!!!」

緑谷君が大声をあげながら黒モヤに突っ込んでいった。

馬鹿！と叫びかけたところで、黒モヤが爆発と共に横殴りにされた。

緑谷君ではない。

助走を付けた拳は爆豪君のものだった。

そのままの勢いで黒モヤを地面に押し倒している。

大きなバツクルのような衣装のような襟のような物体を押さえつけているところを見ると、どうやら黒モヤは不定形に見えて実体を持つているらしい。

さらに切島君がハンドマンに殴り掛かったが、寸前で避けられた。

「平和の象徴はてめえら如きに殺れねえよ」

その間にも轟君がオールマイトにかからないように脳みそ野郎を凍らせていた。

拘束する力が緩んだのかオールマイトは一瞬でその手から抜け出す。

「攻略された上に全員ほぼ無傷。すごいなあ、最近の子どもは…」

恥ずかしくなってくるぜ、敵^{ヴァイラン}連合…！」

なにやらハンドマンがぶつぶつと呟いている。

何発か当たったようだが、威嚇目的の殺傷性のない弾だ。

多少打撲痕が残っている程度で、平然としている。

私は銃を構えたまま、相手の動きを注視する。

私のGPS通信が届いていれば、そろそろ増援が来ても良い時間だ。

危機的状況に体感時間が長くなっているのか、やけに時間が経つのが遅く感じる。

「脳無、爆発小僧をやつつける。出入り口の奪還だ」

脳みそ野郎は凍っていた体を無理やり起こすと、体が半分崩れた。

よほど身体の深くまで轟君が凍らせていたせいだとは思うが、痛みを感じる素振りすらない。

それどころか欠損したところから筋肉が盛り上がるように再生している。

「皆、下がれ!!」

なんだ!? ショック収集の個性じゃないのか!?

さきほど戦っていたオールライトにも動揺が見られる。

「別にそれだけとは言っていないだろう。これは『超再生』だな。脳無はおまえの100%にも耐えられるよう改造された超高性能サンドバック人間さ」

嬉々としてハンドマンは脳みそ野郎について説明する。

完全に元の身体を取り戻した脳みそ野郎は人並み外れたスピードで爆豪君に突撃した。

吹き荒れる暴風に思わず、片膝をつく。

パンチの余波ですら、瞬間的に大型台風並みの風速が出ている。

「かつちゃん!!よ、避けたの??すごい」

「違えよ、黙れカス」

すぐ横を見れば、爆豪君は五体満足。

次に土煙の先を見ると、ガードの構えのオールマイト。

20m近く飛ばされ、地面に足のブレーキ跡が残るほどの衝撃に、血反吐を吐いていた。

「……加減をしらんのか」

「仲間を助けるためだ。仕方ないだろう。さっきだってほら、その、あー、地味なやつ。あいつが俺に思いつきり殴り掛かろうとしていたぜ。」

他がために振るう暴力は美談になるんだ。そうだろう?ヒーロー」

演説ぶったハンドマンは大手を広げる。

オールマイトが間に合わなければ、爆豪君はミンチかザクロになっていた。

背筋が凍るような圧倒的な暴力だ。

暴力の方向性が異なるだけで、これほど恐ろしいことになるとは頭では理解していたはずなのに、むぎむぎと突きつけられる。

「俺はな、オールマイト!怒っているんだ!」

同じ暴力がヒーローと敵でカテゴライズされ、善し悪しが決まるこの世の中に!!
なにが平和の象徴!

所詮抑圧のための暴力装置だお前は!!

暴力は暴力しか生まないとお前を殺すことで世に知らしめるのさ」

「めちやくちやだな思想犯の眼は静かに燃ゆるもの。自分が楽しみたいだけだろう、嘘つきめ」

オールマイトの指摘に手の向こう側で濁った瞳がにたりと笑った。

「ばれるの早…」

「どうやら本当に愉快犯の類のようだ。」

それにしても、持っている力が異常だ。

特に脳無とかいう脳みそ野郎について個性の複数所持に改造された人間といった、な
にやら聞き捨てられない単語が聞こえてきた。

しかも改造されたということは、改造したのは少なくともハンドマンではない。

黒モヤのワープの個性も違う。

チンピラの中に紛れていた?

生徒も襲わせたのはついでではなく、改造のベース探し?

組織的な線もあり得る中で、まずはこの状況を突破しなければ話は進まない。

「3対6だ」

「モヤの弱点はかつちゃんが暴いた」

「とんでもねえ野郎だが、オールマイイトのサポートすりや……撃退できる！」

轟君、緑谷君、切島君が口火を切る。

6というのは、私も頭数にはいつているらしい。▪

だが、ワープゲートが健在ならば飛び道具系の私は戦力外だ。

ワープで味方の背後に弾を飛ばされたら洒落にならない。

「ダメだ!!逃げなさい!!」

オールマイイトが戦闘に入ろうとする私たちを制止する。

「……さっきのは、俺がサポートに入らなければやばかったでしょう」

「それはそれだ、轟少年!!ありがとう!!」

しかし大丈夫!プロの本気を見ていなさい」

オールマイイトは拳を握りしめる。

「脳無、黒霧やれ。俺は子どもたちをあしらう」

ハンドマンがこちらに突撃してくる。

だが、すぐさま飛び上がるようにして後退する。

ビリビリと肌を刺すような気迫がオールマイイトから発せられている。

「ショック吸収ってさっき自分で言ったじゃんか」

オールマイトと脳みそ野郎の拳が重たい音を立ててぶつかると

「そうだな」

オールマイトはいつものように不敵な笑みを浮かべている。

この危機的状况で、笑うのか……。笑えるのか。

「無効」ではなく、「吸収」なら限度があるんじゃないか!?

私対策!?

私の100%を耐えるなら、さらに上からねじ伏せよう!!」

一歩も近づけないような、超人的な速度と超人的なパワーの応酬。一発一

発が必殺の威力を持っている。

オールマイトの口には血が更に滲んでいる。

大砲でも打ち鳴らすような低く重たい音が乱打する。

「敵よ!!こんな言葉を知っているか!!」

一際体重の乗った一撃が脳みそ野郎の腹部に捻じ込まれる。

「Plus Ultra!!」

オールマイトの渾身の一撃を受けた脳みそ野郎はドーム状のガラス天井を突き破り、外へ飛んで行った。

乱闘の先にはまだ土煙が舞っている。

「シヨック吸収をないことにしちまった。究極の脳筋だぜ。出鱈目なパワーだ。再生も間に合わねえ程どのラツシュってことか……」

漫画のような光景に切島君が呆然と眩いた。

轟君もあの爆豪くんですら口を閉ざす光景だ。

これが、プロ。

これがN.O. ーヒーロー。

困難のその先を切り開く存在。

「やはり衰えた。全盛期ならば5発も撃てば十分だっただろうに……」

300発以上も撃ってしまった」

につかりと土煙の向こうでオールマイトの歯が輝いた。

「さてと敵^{ツイラン}。お互い早めに決着を付けたいね」

「チートかよ。衰えた？嘘だろ……」

完全に気圧されたよ。よくも俺の脳無を……」

ハンドマンはブツブツと呪怨のように眩きながら頭を掻きむしっている。

「全然弱つてないじゃないか。あいつ、俺に嘘を教えたのか!？」

「どうした？来ないのか？クリアだとかなんだとか言っていたが、出来るものならして

みろよ」

オールマイトの眼光は鋭い。

あれだけの戦いをした後でもまだ一戦構えるつもりだ。

「くそう、脳無さえいれば!!・奴なら!!・なにも感じずに立ち向かえるのに!!」

「落ち着いてください、死柄木甲。よく見れば、脳無から受けたダメージは確実に表れている」

ハンドマンは口元が手で隠れているし、黒モヤはそもそも口がどこにあるかわからないので、更に聞き取りにくいのが、黒モヤの視線がこちらを向いた。

「どうやら子どもたちは棒立ちの様子。あと数分もしないうちに増援が来てしまうでしょうかが、私と死柄木で連携すれば、まだ十分にチャンスはあるかと……」

黒モヤはまだ続けるつもりだ。

「うん……そうだよな……そうだよ。」

やるつきやないぜ……目の前にラスボスがいるんだもの」

二人は足に力を込め、オールマイトに向かっていった。

「緑谷、種子島。主犯格はオールマイトが何とかしてくれる。俺たちは他の連中を助ける……」

横にいた緑谷君をみると、戦いを見ながら高速で何かを呟いている。

肩でも揺さぶろうかと思つた瞬間、緑谷君が目の前から消えた。ワープではない。

黒いモヤは見えなかった。

「オールマイトから離れろ!!」

緑谷君は黒モヤに向かつて飛び出していた。

あまりに早く跳躍したせいで、消えたように見えたのか。

自由に動けない空中で殴り掛かるなんて無謀と銃を構える。

黒モヤの実体が分からないし、なによりこのままでは緑谷君に当たる。

黒いモヤの中から血色の悪い手が伸びたと思うと、1発の銃声。

モヤの中の手からは鮮血が飛び散る。

「種子島!」

「いや、違う」

私は撃っていない。

そもそも実弾は装填していない。

「I—A クラス委員長飯田天哉、ただいま戻りました!!」

大きな叫び声に振り向くと、USJの入り口にはプロヒーロー兼教員が10名に校長が並んでいる。

さきほどの銃弾はおそらくスナイプ先生であり、今も追撃を掛けている。
更になぜか背中がぼろぼろの13号が二人を吸い寄せるが、それより早く二人は分が
悪いと流石に撤退を決めたのか、黒いモヤと共に消えていった。

6. 個性とは

「……教師陣がこれだけ集まれるっていうことは学校全体に仕掛けてきたことじやなさそうだ」

轟君が教師の顔ぶれを見ながら、肩の息を抜いた。

チンピラは残っているだろうが、主犯は撤退したとみて私は銃の安全装置をかけた。

そういうえば、緑谷君はどうなったのだろうと突っ込んでいった方向をみるといつの間にかセメントの壁ができていた。

「緑谷とオールマイトはリカバリーガールの所に先生たちが運ぶらしい」

真っ先に緑谷君を助けに行つた切島君が教えてくれた。

ネズミ校長が生徒諸君は入り口まで集まるように声を掛けたので移動する。

「やれやれだぜ。オールマイトはやっぱりすげえな」

切島君は場を和ますというより、無理やり空気を明るい方向へ変えようとしていた。

「そうだね。すごかった」

あれほどの力。

オールマイトのような人に授けられた個性で良かった。

そうでなければ、こども平和を享受できていない。

「種子島はどこに飛ばされたんだ？」

「尾白君と一緒に火災ゾーンに飛ばされたよ。紐なしバンジーは二度とやりたくないね」

「紐なしバンジー？」

切島君は得心が行かないと首を傾げた。

「え、空中に放り出されなかった？ビル5階分ぐらいの高さだったけど」

「普通に爆豪と一緒に屋上に落とされたぞ？」

なんだその安全な取り扱い。

人数が多くて雑なのと丁寧なのがあったのか、随分扱に差がある。

一歩間違えれば私はあの段階で死んでいた。

「轟君は？」

「土砂エリアの上の方に落とされたが、着地で怪我する高さはなかった。あと位置もチンピラ連中からみて俺たちの方が高い位置だったから、細かくは調整できなかったみたいだな」

高低差のあるフィールドでは、一般的に高所の方が有利とされる。

しかも土砂エリアなら崩れやすい設計になっているだろうし、下にいる方が土砂崩れ

に巻き込まれやすい。

人数が人数だからワープさせるにしても、そこまで細かく考える時間もなかったのかもしれない。

「黒モヤは一度に20人以上をワープさせる個性だった。けど、私たちの個性までは下調べができてなかった。細かな調整は人数次第って言う所かな」

私の落とし方はともかく、水難ゾーンや大雨暴風ゾーンに落とさなかったのがその証拠だ。

爆豪君にしても、同じだろう。

一人に集中すれば、脳みそ野郎をバックドロップの瞬間に上半身だけ起用にワープさせることも可能なようだ。

そうこう話しながら入り口まで行くと、麗日さんや瀬呂君ほかクラスメイト多数が既に集まっていた。

話を聞くと何人かは飛ばされずにここにいたらしい。

わざわざ出入口近く残しておくとはお粗末と言うべきか、ご丁寧と言うべきか。それとも20人一気にワープは無理だったのか？

確か黒霧と呼ばれていたが、登録はされた個性なのだろうか。

本名かどうかも怪しいが、捜査は警察預かりだろう。

生徒で一番重症なのは緑谷君。

最後、黒モヤとハンドマンの所に突っ込んでいったときに足に力を籠めすぎて両足骨折したらしい。

考えなしなのか、無鉄砲と言うか、力はあるのに使い方が非常に勿体ない。

背中ボロボロの13号は個性を使った瞬間に黒モヤに吸い込み口を転移させられて自分の背中を吸い込んでチリにしかけたらしい。

裂傷はあるが、意識はあつて数日もすればヒーローとして活動再開できるようなものらしい。

オールマイトについては、ボロボロだったがリカバリーガールの処置範囲内とのことだ。

そして一番重症なのは、相澤先生。

眼底骨折、右腕も脳みそ野郎に小枝のように握りつぶされていたようで、応急処置のち病院に搬送された。

その後、一旦着替えて教室に戻り、順に事情聴取となった。

私が聴取を終えて教室に戻るころには、すでに全員の聴取が終わったようで、その後

の指示を待つているところだった。

たぶん、この後の授業は休講で、明日は授業がない可能性もある。

一般生徒にも話が伝わっているのか、廊下を歩いてきた中ではどこの教室も落ち着かない雰囲気だった。

「事情聴取長かつたな」

後ろの席の轟くんに話し掛けられた。

「色々気になる発言があつたつて言つたら長引いたよ」

あと主犯の会話で気になつたところについてかなり掘り下げられた。

主犯の名前だとか、脳無ついで改造されただとか、犯行の稚拙さに対してオールマイトに匹敵するパワーを持つ個人を作り上げると言う組織的な犯行のちぐはぐさが浮き彫りになつた。

ただ、私の担当さんも一緒だつたから、警察もそんなに深くは聞いてこなかつたので、思つたより早く解放されたと思つたが、他の人と比べると長かつたようだ。

「お疲れ。そういうえば、種子島、アレなんだつたんだ？」

「ん？」

ちよい離れた席から尾白君が離れてきた。

そういうえば、オールマイト助ける時に忘れていたけど、無事だつたみたいだ。

「あれでSOS送ったから、校長室に連絡行つてオールマイトが来たんだろ」

「そうだ！狙撃女子!!俺が学校に向かっている途中に遭遇したオールマイトは既に緊急事態だと知っていたが関係あるのか？」

「どうにか敵の隙を突いて会場から抜け出した飯田君が学校側に報告に走っていたが、血相を変えたオールマイトが走ってきていたという。」

「あー、アレね。ちょい事情があつて持つてるものだよ」

「敵による妨害電波をものとはしないとは、よほど高度な製品なのか。そんなものを携帯していたとは、随分と防犯にはレベルが高いが………!!」

狙撃女子、君はまさか“指定”を受けているのか!？」

飯田君の“指定”の言葉に何人かが反応した。

「あれだけの情報でたどり着くのはいかにも勉強もできる優等生な見た目通りだがもう少し考えては欲しかった。」

「飯田君、君の実直なのは美点だが濁した時点で察してほしかったな」

「あ、いや。すまん」

「まあ、別にどつかで言う機会はほしかったから、話すけど」

首に下げていたチェーンを指に引つ掛けて服の上に出す。

担当さんが来ていたので、GPS端末自体は既に新しいものに取り換えは終わつてい

る。

使い捨てじゃなくて、1回信号が出た以上、解析されないように新しい信号にコードを変えるらしい。

これまた安全上の理解はできるが、手間が掛かっている。

「指定つて、なんの指定だ？」

察しが悪いのか、上鳴は首を傾げている。

ちなみに私の左隣に座っている峰田もだ。

「おい、ヒーロー科。受験終わったら脳みそにスポンジでも詰めてんのか」

「ウエイ」

上鳴はアホのフリをして誤魔化した。

「指定個性」って聞き覚えない？」

その言葉でようやく理解したのか、上鳴は居心地の悪そうな顔をした。

他にも妙な顔つきをしているクラスメイトが多い。

「殺傷性が著しい、もしくは広域な被害が甚大と予想される個性のことか」

「個性を持っている人の中でもごく少数、潜在的な個性を含めても100万人に1人の個性ですわ」

轟君と八百万ちゃん、推薦組二人が答えてくれた。

「正解。認定数は4月現在で89人。1級指定15人、2級指定74人。現状、全人口で見れば100万人に1人より少ないよ。てか、今運用上は個性というより、個人単位だけどね」

指定個性とは通称であり、正式には『特定指定個性対策法』という。

「二人の言ったとおり指定の定義としては、個性の殺傷性が著しく高く、人命に影響がある個性。もしくは広域に多大なる被害をもたらす可能性が高い個性だね。私の場合は材料さえそろえば証拠も残らないし、あといろいろな事情も加味されて指定されているよ」

私の個性『銃&弾』はその指定個性の一つだ。

物体の重さが200g以内のものは銃弾に、それ以上の重さのものならば銃か弾は選んで転化させることができる。

液体であつても容器に入っていれば弾として転化でき、一度転化したものは銃でも弾でも物体を混ぜ合わせないかぎり元に戻すことができる。

例えば鉄材と木材を転化させて1丁の銃を作ったら元に戻せないが、鉄パイプだけで転化させて銃にすれば、元の鉄パイプに戻すこともできる。

そういう意味で証拠は残らない。

一度転化させた材料を調べたところで銃器に変化したという結果は今の科学では計

測できない。

「例えば爆豪君のような爆発系の個性でも、個性を使ってコンクリートに風穴開ける程度じゃあ指定は受けない。もしこれが仮に、グラウンドβだとかUSJを粉塵に変えるような規模の爆発を1回で起こせるなら指定は免れないだろうね」

「それ、爆弾じゃなくて個性？」

峰田が顔を青くしている。

「個性だよ。山一つ吹き飛ばすとか、10m級の津波を引き起こすとか、上空1万メートルを飛行するジェット機を地上から小石一つで撃墜させるとか、そういう地図を書き換えるようなデータメな個性をもつ人は日本だけでも両手じゃ収まらないんだよ」

ちなみに13号の持つ『ブラックホール』も指定個性だ。

そういう意味ではオールマイトも指定されても不思議ではない個性ではあるが、彼の場合は小中学校での一斉個性カウンセリングで見逃されたのか、導入以前だったのか、今までの功績があつてからか、指定されているという話は聞いていない。

まあ、指定個性と言つても公表されているのは指定の人数だけで、どのような個性が指定されているのかという事は噂話程度でしかない。

「種子島ちゃん」

峰田が更に顔を青くした。頭の形もあつて、気色の悪いブドウのようだ。

「私の場合、作り出すのが銃と銃弾だから、殺傷性持たせて許可なく使えば銃刀法違反で豚箱行きだよ。指定を受けたら数か月に一度の国の担当官との面会と継続的な個性の訓練の義務がある。反面、個性の制御に関して日常生活にかかる負担については国から補助が受けられる。ちなみに個性の発動・制御訓練に関わる材料なんかは国からの補助が出ていますし、訓練場の使用も無償」

事情聴取に担当官がついたのはそのためでもあった。

指定個性と言うだけで不当な取り扱いはされていないか、個性の使用は適切だったのか、調査の名目もある。

「じゃあ外部に連絡できたのは？」

今度は緑谷君が質問してきた。

そういうえば、両足骨折していたみたいだがリハビリに治して戻ってきたらしい。

「10年位前に某国で強力な個性を持つ者を誘拐してテロリストに仕立て上げたっていう事件は覚えてない？」

多分まだ小学校ぐらいで、私が指定を受ける前のことだ。

宗教戦争とか国内部の権力争いとか支援する第三国の代理戦争とか複雑な事情が絡まった某国で、触った物体を爆弾に変えると言う個性をもつ少年が某国と敵対する国で

大規模テロを起こして世界的なニュースになった。

被害者の数は個性犯罪の中でも飛びぬけており、個性の資格化と使用制限が世界的に一層厳しくなった。

しかもその少年は一般家庭のごく普通の少年だったが、特異的な個性のせいで誘拐され、少年兵として仕立てられたらしい。

そういった背景もあって、各国ではあまりにも強大な個性を持つ場合、一定の措置を取る事も止む無しとされた。

「個人が強力な武力を持つことは、国家の脅威と見なされる。日本での法の審議当時、個性関連の法案じゃなくてテロ対策の関連法案に定められるべきだと主張する政治家もいたらしいよ」

まあ、テロの危険だけじゃなくて日本で言う所の指定個性を持つ人物を軍人とさせて、戦争の抑止力になっている国だってあるし、戦時特務尉官として戦争時徴用できるように契約している国だってある。

「つまりGPSで常に監視されているってこと？」

「これは任意。ただ断る人は少ないそうだよ。実際、指定されていることが外部に分かって、国内外の犯罪組織が誘拐を企てたケースなんていうのも珍しいことじゃない。GPSも常時起動させておいてもいいし、自分でオンオフできるからあくまで保険だ

ね」

指定自体されていること自体が危険性を増すし、色々な蔑視もあることにはあるが、受けられる恩恵も大きい。

影響力が広域的な個性であれば、どうしたって個性の制御や訓練にはある程度の広さと機密性が必要になる。

個人単位でそれを用意することはまず難しく、国指定の訓練所で制御と自分の限界を知る事ができる。

調査されているとも同義ではあるが。

「怖い?」

緑谷君は自分の握りしめた手を見ていた。

超。パワーの持ち主なら思うところがあるのかもしれない。

「えっと、いや、その……」

緑谷君は慌てて首と手を横に振った。

「なんか、あんまり種子島さんがそんな風に思えなくて……」

まあ、まだ最大火力は見せていないからかな。

「そっか。まあ、フレンドリーファイアなんて寝覚めが悪いから、精々射線には入らないでね」

私の個性はあくまで作るのは銃と弾だけで、射撃の腕は自前になる。

どの個性も使い方を間違えてはいけないけれど、その中でも私の場合は命に左右する。

緑谷君が最後、オールマイトと敵の間に入り込んだ時に撃つかどうか躊躇ってしまった。

人に対して使うことにもう少し慣れなければいけないと、また担当官への相談事項が増えた。